

面会室の扉が軋んだ音を立てて閉まった。重い金属の音は、鉄格子の奥に沈黙を置いていく。

そこにいたのは、蹄のついた脚を組み、柔らかな布で目元を覆った一人の獣人

ミュータント

——いや、今や思想犯として収監された男、ヤフヤだった。

「……何の用だい？　もう事件の供述は終わったはずだろう」

ヤフヤは鼻先をわずかに動かし、訪問者の香りと足音からおおよその人となりを測る。視界を日常的に塞いでいる彼にとって、習慣的な行為だった。

制服の布地の香り、そこに染みついた香水の香り、安物のペンの香り。足音はやや固い。……女で、まだ若手の記録管と推測できた。

「本日は……過去の関係者について、補足的に伺えればと」

「……ふむ。過去の関係者、か。もしかして【メロン】の話か？」

ヤフヤは口元だけで笑った。軽薄さのない、静かな見透かしだった。

記録管は一瞬口ごもったが、すぐに頷き直す。緊張が抜けきらない様子だった。

「はい。……彼とあなたには古い付き合いがあったと、いくつか証言が出ています」

ヤフヤは深く、何かを呑み込むように、息をつく。

「彼について、君たちはどこまで知ってるんだ？」

「彼は無戸籍者でした。市民登録にも、該当データがなくて。ただ、戦線の立ち上げに関わっていたという証言は多く得られています。……あの事件の前後との関係を、いま整理しているところです」

「丁寧な建前だ。つまり君たちは、なぜあれほどの事件を起こすまで彼が追い詰められたのか」を探ってるってことか」

それだけ言って、ヤフヤは背もたれに深く体を預けた。頬の筋肉がわずかに引き攣る。かつての友人の名が、いかに苦味を含むものとなったかを、その表情が物語っていた。

「どこから話そうか。僕が彼に出会ったのは——そうだな、まだ二十歳ぐらいの時から。街角で、化け物退治に巻き込まれた時だ」

ヤフヤの声が、少しだけ遠くなった。音として変わったのではない。言葉の奥に、過去の湿度が混じった。

「随分派手にやられたよ。物音に気付いてこっちを覗く人もいたけど、すぐ見なかったことにして去って行った」

「……彼はそうではなかった？」

記録管の推測を、ヤフヤは首肯した。

「あつという間だった。彼にとっては、あの程度慣れっこだったろう。手早く三人の男を叩きのめして、僕に手を差し伸べた。それが始まりだ」

ヤフヤの指先が机の縁をゆっくりなぞる。繋がれた鎖が微かに擦れ合う音が、室内に新たな静寂を落とした。

「それから何度か顔を合わせるうち、*“組織を作ろう”* と言い出したのも彼だった。

表向きは能力者の自衛のため、だったかな……いや、もつと単純な言葉だった。*“俺たちの居場所を作ろうぜ”*。そんなふうに言ってた」

記録管は、その言葉の奥に揺れる何かを感じた。

それは確かに、今この面会室の中で語られる革命家の言葉だった。

だが同時に、そこには少年の面影もあった。過去の希望に心を焦がし、その火傷の跡を隠しきれない少年の。

「彼は……群れを編むことの天才だった。暴力だけじゃない、酒や冗談や、時には共感まがいの言葉で、居場所のない者たちを集めた。僕はそこに意味を見た。秩序からはじかれた能力者たちが、自らの力を肯定できる場所。夢想していた光景が、輪郭を結んだ気がした」

「……彼はあなたにとって先達であったと、そういう風に聞こえますが」

「そうだな、先達だったとも。彼なくして、今の僕も【戦線】も有り得ない」

目隠しの下から、少しだけ鼻が鳴った。

「彼が【解放前線】を立ち上げると言った時、僕は正直、眩しかった。僕なんかじゃ辿り着けない場所に、彼はあっさり足を掛けてしまった。無戸籍者で、職もなく、学もなく、それでも街の誰よりも社会を読んでいた」

ヤフヤの語り口は、あくまで穏やかそのものだった。だが、その芯には何か硬いものがある。敬意とも、軽蔑ともつかぬ思いが、彼の言葉の一つひとつにまつわりついていた。

「彼にとって誤算だったのは、集まった者たちがまっすぐだったこと。誰も彼も、ほんとうに変わりたいと願っていた。差別を無くしたい、仲間を守りたい、意味を持ちたい——そんな、真剣な眼差しばかりだった」

「彼は……嫌がった？」

「笑っていたよ、最初は。うまくいったって顔をしてね。旗を掲げただけで、勝手に人が集まる。言葉もいらぬ。力を示せば、それだけで従う。彼は『群れ』が動き出す音を聞いていた筈だ。しかし、そこにあつたのは、従順な兵隊じゃなく、希望を信じる人間たちだったわけだ」

目隠しの奥に沈黙が流れ、その耳が、わずかに動いた。

面会室の空調の音が、鉄と埃の匂いを運んでくる。だが彼の意識は、今そこにはなかった。昔日の、熱と、声と、視線の渦にあった。

やがて、ヤフヤが再び口を開いた。

「そこからは早かった。彼は徐々に口数が減っていったよ。居場所が狭まっていくのを、きっと本人が一番感じていたはずだ」

「そして最後は、あなたが彼を追放した？」

「……ああ。僕が言った。『もう君にはいてもらわなくていい』ってね」

やや間を置いた言葉は重く、それでいて明瞭だった。紙に落としたインクのように、言葉がゆっくりと沈み、拡がっていく。

「彼は喚いたり暴れたりはしなかった。ちよつと笑つて……それから姿を消した。僕らが覚悟していたような、恨み言一つさえなかった。その手の別れに慣れていたんだろう。たぶん、ずっとそうやって生きてきた。僕らが彼らを見限ったんじゃない、むしろ逆だったのかもしれない」

記録管は、しばらく言葉を継げなかった。

ヤフヤの声に、悲哀はなかった。あまりに静かで、あまりに乾いていた。その乾きの中に、湿り気のある哀しみが、影のように張りついていた。

「最後に彼と会ったのは、たしか……」

その言葉は、思ったよりも静かに落ちた。

「……グニパヘリルの一件の、三日前だったかな」

記録管が、思わず息を呑んだ。空調の音に紛れる程度の微かな音だったが、それを聞き取ったらしいヤフヤの耳がひくつく。

「バーで偶然会った。正直……声をかけるかどうか迷ったが、向こうは気にしていないみたいだったけれどね」

「……どんな話を？」

「他愛のない話さ。昔の仲間の近況、酒の味、街の騒がしさ。彼の調子と一緒にいた頃と変わらなかった。時間だけが通り過ぎて、彼だけが置いていかれたみたいだった」

今度はヤフヤが、息を吐いた。その息は笑いにも、嘆きにもならず、重く空気を揺らすだけだった。

「最後に言ったんだ。『また群れでも作るのか？』って。彼は『もういいよ、めんどくせえ』って笑っていた。……本心だったと思うよ」

ヤフヤの語り口は淡々としている。その余白の多さが、むしろ記録管の胸を締め付けた。言葉にされない何かが、壁に染み、空気を濁している。

「……あなたは、彼の最後をどう受け止めていますか？」

ヤフヤはしばらく考えるように口を閉ざした。

沈黙の中、彼の蹄がかすかに床を打つ音が面会室に響いた。それは時間を刻むようでもあり、何かを探る足音のようでもあった。

「彼は……そうだな。妙な言い方になるが、よく生きたと思うよ」

記録管の手が止まる。思わず顔を上げた彼女の視線へ、ヤフヤは目隠し越しに応じた。

「彼は諦めたとか、自暴自棄になったとか、そういうわけじゃあないんだ。やり方はどうであれ、グニパヘリルでの事件は、彼が生きようとした結果だと思う。牙を剥いて、手を汚して——ただ、世界がそれを許さなかっただけさ」

怒りも悔いもなかった。ただ静かで、正しさや間違いでは測れない何かがある、そこにあった。

「誰も弔わないだろう。名も、墓も残らない。けれど彼は、僕の始まりだった。理想に燃える僕に、現実という名の錆びた刃を突きつけてきた男だ。切り捨てたつもりでも、結局、僕の中にはまだ彼がいる」

少しだけ間を置いて、彼は続けた。

記録管に、もはや彼の言葉を書き留めることはできなかった。ただ黙って、そこにいた。

——面会時間、終了です。

機械的なアナウンスが響き、室内の空気が切断されたように変わった。

記録管が立ち上がり、ヤフヤに一礼する。彼は立ち上がりもせず、目隠しの奥でただ頷いた。

面会室の扉が開き、記録管が出ていく。重い金属の音が再び響いた。

その音を背に、ヤフヤはただ一人、静かに呼吸を続けていた。言葉を失った空間の中、彼だけがまだ、語りの続きを生きていた。